



キリスト教思想史Ⅱ アウグステイヌスから宗教改革の前夜まで フスト・ゴンサレス著／石田学訳

7月24日発売

著者が思想家としての本領を發揮した名著。
多様な思想の成立と展開を、単なる「教理史」の枠に閉じこめず、教会と社会の重層的な視点から読み解く。
英語圏、スペイン語圏では教科書としても定評があり、広く用いられている。

◆A5判・440頁・本体5000円 (全3巻)



著者は1937年キューバで生まれる。イエールで学び、歴史神学の分野では同校史上最年少で学位を取得。エモリー、コロンビア等で教鞭をとり、アトランタの超教派神学校を最後に現在は引退。スペイン語圏におけるプロテスタント神学の発展を牽引してきた。

好評既刊

キリスト教思想史Ⅰ ゴンサレス著／石田学訳

キリスト教の成立からカルケドン公会議まで 本体5000円

キリスト教史 ゴンサレス著／石田学・岩橋常久訳

上巻 初代教会から宗教改革の夜明けまで 本体5700円

下巻 宗教改革から現代まで 本体5500円

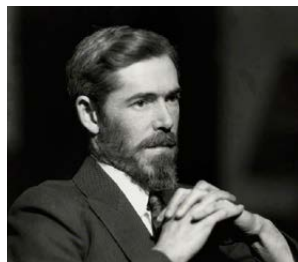
【目次より】

- 1 アウグステイヌスの神学
- 2 アウグステイヌス以後の西方神学
- 3 第四回公会議から第六回公会議までの東方神学
- 4 カロリング・ルネサンス
- 5 暗い時代
- 6 十二世紀の文芸復興
- 7 イスラムの進出から第四回十字軍までの東方神学
- 8 十三世紀の概説
- 9 十三世紀におけるアウグステイヌス主義の伝統
- 10 ドミニコ会学派
- 11 極端なアリストテレス主義
- 12 コンスタンティノポリス陥落までの東方神学
- 13 中世後期の神学
- 14 夜明けか、薄暮か

ジョン・マクマレー研究

キリスト教と政治・社会・宗教

宮平望著



日本人の手になる初の本格研究
 ジョン・マクマレー (John Macmurray, 1891-1976) はスコットランド出身のキリスト教哲学者。第一次大戦での従軍体験の後、共産主義の問題と取り組み、「関係としての人間存在」に着目した深い人間論に基づく独自の共同体思想を形成した。また後年はキリスト友会に属し、平和主義者として影響力をもった。トニー・ブレア前イギリス首相に影響を与えた思想家としても注目されている。

◆ A5判・233頁・本体2400円

著者みやひら・のぞむ氏は1966年生まれ。同志社大学、ハーバード大学、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学などで学ぶ。現在、西南学院大学国際文化学部教授、神学博士。著書には、『神の和の神学へ向けて』、『責任を取り、意味を与える神』、『苦難を担い、救いへ導く神』、『戦争を鎮め、平和を築く神』、『現代アメリカ神学思想』、『神の和の神学入門』、『新約注解』、『私訳と解説』シリーズ全12冊など多数。

【目次より】

- 序章 ジョン・マクマレー研究
- 第一章 ジョン・マクマレーの生涯と思想
- 第二章 共産主義と民主主義
- 第三章 社会と共同体
- 第四章 宗教と信仰共同体
- 結章 ジョン・マクマレーへの批判的評価

● 待望の新装復刊

宮平望著

神の和の神学へ向けて

三位一体から三間一和の神論へ

日本から発信する神学！ 聖書が証言する神を、「間」と「和」という日本的な思考と感覚をとおして表現し告白しようと試みる、新たな神学の冒険。本書はかつて、すぐ書房から刊行されたが、版元廃業のためここに新装復刊。

◆ A5判・本体2400円

新教コイノニア34

宗教改革と現代

月刊誌「福音と世界」2017年1月号から6月号まで行われた宗教改革500年を記念する連続特集を、新たな寄稿も加えて単行本化。宗教改革が目指したのも・もたらしたのも、双方を見つめながら、多様な視点から現代の課題を考える。

◆A5判・予価2000円

マリリン・ロビンソン／宇野元訳

ギレアド

2005年にピューリター賞と全米批評家賞を受賞した小説。ギレアドという片田舎の町で、自らの死期を意識する老牧師が、再婚した妻との間にもうけた幼い息子に宛てた手紙の中で、南北戦争以来三代にわたる牧師父子の信仰のあり方や、隣人たちの人生を、様々なエピソードを交えながら、静かな語りをおして振り返る。

◆四六判・予価4000円

一色哲著

南島キリスト教史入門 (仮題)

琉球王国の最大版図とほぼ重なる「南島」のキリスト教は、日本のキリスト教に従属しない独自の深さと広がりを持つ。なぜ南島には多くの教会が建てられ、現在でも多くの人の信仰を集めているのか。その歴史を丹念な調査と重層的な視点から追究した力作。

◆四六変判・予価2300円

●7月に出た本と雑誌

正教会入門

テイモシー・ウエア著／松島雄一監訳

東方キリスト教の歴史・信仰・礼拝



初版以来、入門書として不動の地位を保ち続けてきた書。深く正確な解説により、正教会、ひいてはキリスト教全体への理解が深まる。

◆A5判・本体4000円

待ちつつ急ぎつつ

キリスト教講話集IV

井上良雄著



60年台から90年代までの講話11編を収録。世との連帯を求めて教会に仕え続けた信徒神学者の至純な言葉。四巻完結

◆新書判・本体1700円

宗教改革史

ローランド・ペイントン著／出村彰訳

16世紀の歴史的条件に広く目配りし、改革者たちの信仰に深く内在し、その全容をコンパクトにまとめた定評ある通史。翻訳に手を入れ新版として記念復刊。

◆四六判・本体2800円



福音と世界

8月号 特集 象徴天皇制・国家・キリスト教

◆税込635円

寄稿者・島園進、河西秀哉、上村静、堀江有里、中川信明、森田喜基、柳美里、内田樹、月本昭男、辻学、佐藤優他

●先日、ある新作映画の試写版を鑑賞する機会がありました。現代フランスを代表する監督のひとりアンヌ・フォンテーヌ監督の最新作『夜明けの祈り』です。この作品は、1945年のポーランドで独ソ戦の後に成立した、ソ連を後ろ盾とする共産政権下でじっさいに起こった事件をもとにして描かれています。

●主人公は、フランス軍兵士の帰還を手助けするために派遣された赤十字の女性医師、マチルド。物語は、ある日かのじよのところへひとりのシスターが駆け込んできたところから始まります。必死に請われて修道院へ向かうと、そこには妊娠、出産間際のシスターたちの姿が。やがてマチルドは、大戦末期にこの地を占領したソ連兵によって、7名ものシスターが暴行され妊娠させられた事実を知ることになります。やむにやまれぬ思いからマチルドはその出産を手助けすることになるのですが、修道院長は産み落とされた子どもにも複雑な表情をむけ、やがて物語は思いもよらぬ方向へと進んでいくのです。神にのみ身を捧げるといふ強い信仰をもつシスターたちは望まぬ妊娠という事実をどのように受け止めるのか、マチルドはシスターたちの意志とどのように向き合うのか、この暗い夜が明ける

ことを願う祈りは聞き届けられるのか。抑えめな色調の映像がポーランドの雪景色を美しく際立たせるとともに、それを背景として繰り広げられる人びとの葛藤が、観る者の心を揺さぶります。

●理不尽な苦しみを前にして信仰がもつ力強さとあやうさの両面を描いた良作ですが、個人的にはその主題とともに、軍による性暴力の凄惨さと、それがシスターたちを傷つけ打ちのめすさまも強く印象に残りました。かつて日本軍がアジアの各地で組織的におこなった性暴力のサイバーの方のことや、いまも沖繩で繰り返される在日米軍の性暴力のことを思えば、劇中で描かれた暗い夜の時代は決して明けていないとも言えます。厳しい状況下でシスターたちのために献身的に働くマチルドの姿は、単に感動を呼ぶばかりではなく、この時代にあつて私たちは闇の中に灯りをともすべく働くことができているかという問いかけとしても受け止められるように思います。(堀)

『夜明けの祈り』＝©2015 MANDARIN CINEMA AEROPLAN FILM MARS FILMS FRANCE 2 CINEMA SCOPE PICTURES
配給：ロングライド8月5日(土)、ヒューマン・トラストシネマ有楽町、新宿武蔵野館ほかにて全国順次公開。

福音と世界

2017年
9

A5判・80頁・定価635円・送料70円
年間予約購読料(送料共)8460円

特集・沖繩——過去・現在・未来

ひらかれゆく戦後沖繩の民衆思想

——アジアからの公同平和—— 森 宣雄

戦後沖繩における軍事占領とキリスト教の

二つの潮流——戦前からの連続性と沖繩キリスト教史の構造—— 一色 哲

辺野古・高江でいま起っていること

——金井 創

女性の視点で基地・軍隊を捉えなおす

——山城紀子(しんげい)——

HIPHOPの群島——ローカルを代表するグローバルなビート—— 浜 邦彦

■インタビュー 政治と聖書と神の国
……リチャード・ボウカム

【連載より】

- ◆ はじめての台湾キリスト教史 6 ……高井ヘラー由紀
- ◆ みことば散歩 9 ……望月麻生
- ◆ 聖書とわたし 19 ……栗原 康
- ◆ アメリカの神学と教会のいま 11 ……吉松 純
- ◆ 現代神学の冒険 12 ……芦名定道
- ◆ 新約釈義 第一テモテ書 19 ……辻 学
- ◆ レヴィナスの時間論 30 ……内田 樹
- ◆ 詩篇の思想と信仰 148 ……月本昭男